

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2009年）

4月 1日 今日の通読箇所 エレミヤ書 14章10～18

「心は地に」

「罪を許したまえ。しかしだめだ。罪の結果手にいれたものを手放さずにいて、その罪が許されようか。言葉は天を目指すが、心は地に留まる」ハムレット中クローディアスの祈り。エレミヤ書にも、罪をそのままにしておく者の祈りも断食も、礼拝も捧げ物も、神は受け入れない。また罪の問題に触れない預言者が、いくら祝福の預言を語っても、その言は成就しないと、警告しておられるのだ。われわれはここでも「神の求めたもう供え物は、砕けた魂」であることを改めて知るべきだ。

4月 2日 今日の通読箇所 エレミヤ書 15章1～9

「神からの退却」

やがてイスラエルに襲いかかる、疫病、剣、飢餓、捕虜の運命。エレミヤの悲痛な預言の言葉は続く。その理由は、「主は言われる。あなたはわたしを捨てた。そしてますます(わたしから)退いて行く。それゆえ、わたしは手を伸べてあなたを滅ぼした」と主自ら言われるとおりである。イスラエルのように、神の選民として、特別に神の教えを受け、祝福に預かったものは、それだけ重い責任を問われるのだ。我々クリスチャンの祝福も、決して彼らに劣らない。責任も重いのだ。どうか「次第に、ますます神から退き、ついには神を捨てる」ようなことにならぬよう、お互いに戒めたいものです。

4月 3日 今日の通読箇所 エレミヤ書 15章15～21

「聖書の喜び」

さすがのエレミヤも、報いられない奉仕に疲れた。しかし彼はここで言っている。「わたしはみ言葉を与えられてそれを食べました。み言葉は、わたしに喜びとなり、心の楽しみとなりました」これは聖書を読むものに、いつも経験される祝福である。また主はエレミヤに「わたしはあなたをこの民の前に、堅固な青銅の城壁とする。彼等があなたを攻めても、あなたに勝つことはできない。わたしがあなたと共にいて、あなたを助け救うからである」と言われた。み言葉に立つものは強い。

4月 4日 今日の通読箇所 詩篇 第74篇1～11

「神殿の破壊」

昔からエルサレムの神殿ほど、攻撃の目標とされ繰返し破壊された宗教施設も珍しい。イスラエル人がシナイ山で律法を受け幕屋を建て、民族国家であるより「公会」すなわち宗教団体として発足して以来、神殿はこの国の祝幅の中心だったのに。何故神は懐手をしてこの事態を見ておられるのか。それはイスラエルが神に背いて罪を犯したからだ。「何故」神殿の破壊を、神は放置されるか。その「何故」こそ、彼らが自分に向けて問うべき問題だった。

4月 5日 今日の通読箇所 詩篇 第75篇1～10

「われらと神」

詩篇の読み方の一つは、発言者に注意することだ。特に発言者が途中で変わる場合に注意が必要だ。この詩篇では、[1節]および、[6～10節]は詩篇の作者が神に向かって申し上げている、祈りでもあり信仰告白でもある。中間の[2～5節]は、彼の祈りに対し信仰に対して、これを受け入れ、是認し、支持してくださる神の応答の声だ。かくて信仰を励まされた詩人は、感謝と確信をもって賛美している。これが詩篇の、また我々の祈りの一つのパターンだ。

4月 6日 今日の通読箇所 詩篇 第76篇1～12

「立ち上がる主」

エルサレムはイスラエルにとって、神の臨在と祝福のシンボルだった。人々が神に従っていた間、神は常にこの町を守りたもうた。エルサレム包囲攻撃中のアッシリアの軍隊を、主の使いが攻撃し、一夜に18万5千人を殺して退却に追い込んだ話もある。我々にとっては、教会が主の臨在と祝福の中心だ。いつも教会のために、神の保護と祝福を祈ろう。むかしのエルサレムと同じく、しばしば教会も悪魔の攻撃にさらされるのだから。

4月 7日 今日の通読箇所 詩篇 第77篇1～15

「自問自答」

淋しい一日が終わった詩人は「夜、わが心と親しく語る」。いわゆる自問自答だ。「主は永久にわれらを捨てられたか」というような質問をくりかえしているらしい。うなだれた魂からはなかなか積極的な答えは出てこない。しかしそのうちに彼は聖霊に導かれて「過去の奇跡的な神のみ業」を考え始めた。かくて、次第に自分の心からも、信仰の励ましの声が聞こえ始めるのだ。

4月 8日 今日の通読箇所 詩篇 第78篇1~18

「子孫に教えよ」

礼拝中の母子室は一種の壮観だ。今館林教会は赤ちゃんを連れた母親クリスチャンがとても多いからだが、これもすばらしい恵みだ。私達は主の教えを、子供から子孫までよく教えなければならない。ユダヤ人は「子供に職業を教えないのは泥棒を教えるのと同じだ」といった。子供の心をしっかり主の教えで武装しておかないで、不用意のまま悪しき世に送りだせば、悪魔の餌食に曝す結果となるから、とても成り行き委せではいけないのだ。

4月 9日 今日の通読箇所 詩篇 第79篇1~13

「エルサレムの回復」

失敗と罪に対する裁きの結果には違いないが、イスラエルの栄光のシンボルであるエルサレムの度々の滅亡は、その歴史を読む者にさえショックを与える。しかし神は裁きまた許す神である。荒廢のエルサレムから、真実な悔い改めをもって神の憐れみとエルサレムの回復を祈るのは神のみ心だった。我々にとって教会はエルサレムだ。同じように、教会のなかから、神の栄光と教会の祝福のために、耐えず謙遜真実な祈りがささげられなければならない。

4月10日 今日の通読箇所 詩篇80篇1~19

「み顔のひかり」

「み顔の光によってわれらをもとに戻して下さい」が二回繰り返されて、この詩のテーマであることを示している。今我々の教会が、この詩篇のイスラエルのように主の祝福を失い、特に不振だとは言わない。しかし毎週木曜日に勉強している使徒行伝の教会の姿などを見れば、謙って「我々をもとに戻して下さい」と祈らなければならないのを感じる。かつての教会の栄光、新しい教会の栄光の為に祈り求めて行こう。

4月11日 今日の通読箇所 詩篇81篇1~16

「口を広くあけよ」

私は若い時から気が弱いので集会のお祈りができなくて本当に困った。殊に聖会などではそうだった。その時しばしば牧師から示されたのは、20節後半の言葉だった。どうも苦しかった。しかしこれが案外、謙遜、真実、信仰、告白、勇気などの霊的な勝負に繋がり、この単純なことが、実は信仰生活の秘訣の一つだということも分かったのだ。

4月12日 今日の通読箇所 詩篇82篇1~8

「神々の裁き」

詩篇の中で最も難解な一つだ。わたしは1節の「神々」を「罪びとの世が弱肉強食に陥らぬように守り、人民を指導保護するため、神から大権を託された政治権力者」と見たい。もし彼らが権力を、弱いもの貧しいもののために用いず、自分の利益に悪用するならば、彼らには地上においても未来においても、常人以上に手痛い神の裁きが待っていることを覚悟せねばならないのだ。

4月13日 今日の通読箇所 詩篇83篇1~18

「神の沈黙」

クリスチャンでも時々、いくらお祈りしても中々答えられず、神がクリスチャンの苦しみをいつまでもただ見ていらっしゃるような気がすることがある。ある神学者はヨブ記のことを書いた本に「神の沈黙」という題をつけた。ヨブも苦難の日々の間何回も「神様、なぜ黙って見ておられるのですか」と悩んだに違いない。しかし先日学んだように彼も最終的には「神の恵み深い」ことを知ることができたのだ。祈りと忍耐とは共にクリスチャンに必要なだ。

4月14日 今日の通読箇所 詩篇84篇1~12

「神の家の門番」

私はクリスチャンになった少年の頃、それまで面白かったところは急に魅力を失い、ただただ教会にのみ入りびたっていた。それゆえ「悪の幕屋にいるよりは、神の家の門番」が良いというこの詩篇の意味はすぐ理解ができた。これはいつでもクリスチャンの心情で、なぜ以前はあんな不潔、低級な場所が楽しかったのか不思議なくらいだ。足をきれいに洗った者にとっては、もう世の泥水は汚くて魅力はない。とてももう一度そこで足を汚す気にはなれぬ。

4月15日 今日の通読箇所 詩篇85篇1~13

「リバイバル(再生)」

我々が今集会で使っている「聖歌」は、以前は「リバイバル聖歌」と言っていた。この詩篇の「われらを再び生かされないのですか」などからとった言葉だが、この言葉も今は以前ほどはやらない。しかしわが教会では来年秋に羽鳥先生を迎えて特別集会所が計画され、一年間を、教会を挙げた徹底的伝道に捧げたいと祈っている。われらの教会にとって、本当にリバイバルの年になるように今から祈って行きましょう。

4月16日 今日の通読箇所 詩篇86篇1~17

「真理の歩み」

車を運転して出かけるときに道を良く知らないのは本当に心細い。もし誰かも親切丁寧に教えてもらおうといかにも心強く安心だ。11節の「あなたの道を教えてください」というのは、人生そのものの道、また神のみ心の道を知るための祈りで、若者には特に大切だ。同時に一家の主人が家族と共に祈る大切なポイントだと思う。家族共に心を合わせ主を恐れて生活するために。

4月17日 今日の通読箇所 詩篇87篇1~7

「家族の登録」

6節に「主が諸々の民を登録される時『この者はかしこに生まれた』と記される」とあるのは「エジプト、パピロン、その他どこの異邦国で生まれたものでも、教われた時には『シオン=神の国』に生まれた者、即ち『シオンの市民』として登録される」という意味だ。我々も生まれた場所も家庭も様々なのに、救われて教会に加えられてみると、まるでここで生れた一家族のようだ。兄弟以上に仲良く一致し助け合って主に仕えるのは本当にすばらしい。

4月18日 今日の通読箇所 詩篇88篇1~13

「悲しみの歌」

この歌を作ったエズラ人ヘマンについては誰も知らない。マスキールは教育になる歌のことだそう。ただマハラテ・レアノテが作曲して、聖歌隊の指揮者の指揮のもとに、コラの子(グループ)が合唱したことは分かる。この詩は詩篇のなかで最も悲しい、望みも救いも見当らない歌だといわれる。ライ患者の歌のようだ。十字架上のキリストの歌のようでもある。それがすなわち、最も深い人生の教訓の歌なのだ。

4月19日 今日の通読箇所 詩篇89篇1~12

「ダビデの子孫」

神様は罪を犯したアダムとエバに「その子孫の一人に救い主を与える」と約束された。アブラハムがイスラエルの先祖として召されると「救い主はその子孫に」と約束は限定され、次にダビデが王として召されると、この詩篇のように「救い主は彼の子孫に」と約束は次第に限定された。ルカ2章に記されたように、ヨセフ、マリヤともダビデの子孫であることを思えば、神様のお約束の成就是本当にすばらしい。

4月20日 今日の通読箇所 詩篇90篇1~12

「牧師の古希」

牧師もいよいよこの3月で、中国の詩人杜甫が「人生七十古来希なり」と歌い、この詩篇でも標準となっている古希を迎える。牧師は神の憐れみ、会衆の折りと支持によって元気で、なお暫くの奉仕が許されそうだ。どうぞ献身者奉仕者として終わりを全うできるよう、また時にあった的確な出処進退においても証を全うできるよう、牧師と教会の、「おのが日を数える知恵の心」のためにも祈って頂きたい。

4月21日 今日の通読箇所 エレミヤ書 16章1~13

「涙の預言者」

エレミヤは主の裁きの近いこの緊迫した時代に、結婚や家庭の喜びを禁じられたらしい。また目前のわずかな悲しみに、大げさに泣いたりしないように命じられた。いつも彼は、イスラエルの滅亡を見つめ、それを悲しむ人でなければならなかった。それが預言者というものなのだ。それなのに「わたしたちになぜそんな災いが襲いかかって来るのか」と尋ねる者さえあるのだ。エレミヤは「それはあなたがたの先祖と、あなたがたの罪が招く神の裁きにほかならないのだ」と話し続けた。そして繰り返し悔い改めを勧めたのだ。本当に彼こそ「涙の預言者」だった。

4月22日 今日の通読箇所 エレミヤ書 16章14~21

「許しと救い」

イスラエルは度々の反逆のため、アッシリヤ、バビロンの侵略に敗れ、国は滅亡し、国民は捕虜として連れ去られる。しかしやがて彼等の悔い改めと許しの時がくる。その時はバビロンから解放され、彼等は再び帰国を許されるのだ。昔エジプトから救われたのが彼等の信仰の誇りだったが、その以後はバビロンからの解放が、神の恵みに対する信仰の誇りになるだろうというのが、[14,15節]の意味だ。主の許しと救いは、常に我々の信仰の誇りだ。

4月23日 今日の通読箇所 エレミヤ書 17章1~8

「罪の記憶」

罪を犯していい気持ちの人はいない。みな多かれ少なかれ、いわゆる良心のとがめを感じるのだ。しかし問題はすぐそれを忘れてしまうことだ。だからけろりとして罪を繰り返すのだ。罪とは「積み重ね」の意味だというのが、本当にそうだ。しかし実は[1節]にあるように、罪は神の前(祭壇の角)に、また我々自身の潜在意識のうち(心の碑)に、深く強く記憶されるのだ。裁きの日には、神によって我々の罪は明らかに開陳され、我々の記憶、自覚も明確に呼び覚まされて、一言もなく裁きに服するのだ。いつも厳粛にそのことを思い、恐れ慄いて罪を

避けましょう。

4月24日 今日に通読箇所 エレミヤ書 17章9～18  
「ころころ」

[9節]人間の心は底の知れない不気味な深淵だ。またラッキョウのように幾重もの偽善の皮に包まれているが、奥底に根を張るのは罪の本質だ。だから思いがけない時に思いも寄らぬ物が出てきて本人さえまごつくのだ。日本語の「心」は「ころころ」から来ていると言うが、ころころする心の動きは自分でも制するのが難しい。しかし[14節]にまた言う「主よ、わたしをお救い下さい。そうすればわたしは救われます。」わたしたちが謙遜正直に罪を悔い改め、祈りと信仰をもって主の救いを受け入れる時、キリストの血と聖霊は、私達の罪を許し、根底から、その全人格を造り替えて下さるのだ。

4月25日 今日に通読箇所 エレミヤ書 17章19～27  
「聖日礼拝」

「安息日には一切の仕事を止めて心身を安め、心静かに礼拝を守りなさい」という、神の恵みの規定がエレミヤの時代にはルーズになっていたらしい。一事は万事だ。これを手始めに、彼等は生活の万端において神の教えを軽んじ無視し、ルーズな生活に墮落していたのだ。エレミヤはその生涯に多くの面から、多くの説教をしたが、ここでは「安息日の規定の無視混乱」を指摘し警告を発している。これは今日のクリスチャン、教会にとっても重要なテーマだ。忠実に聖日礼拝を守らず、何かということ他のものを優先させて礼拝を欠席し、それがあらゆる面に影響するのは、昔のユダヤ人だけではない。

4月26日 今日に通読箇所 エレミヤ書 18章1～11  
「陶器師と粘土」

エレミヤが陶器師の仕事を見ている。うまくできないと、粘土の柔らかいうちに、何度でも壊しては、気にいったのができるまで、また造り替える。エレミヤは陶器師の仕事を見ながら考えていた。これと同じように、人が罪を犯して、神様の怒りを買うことがあっても、柔らかい素直な心で悔い改めれば、神様は何度でも許して彼を受け入れ、祝福の器として造り直して下さるのだと。やがて彼は人々の前に陶器を持ち出して、実物を示しながら、悔い改めを勧める説教をした。しかし彼等は強情でなかなか悔い改めないのだ。

4月27日 今日に通読箇所エレミヤ書 19章1～13  
「壺の破壊」

神様はもう一度エレミヤにメッセージを語るようにお命じになった。エレミヤは、またみんなの前に陶器の壺を持ち出した。「まだ粘土が柔らかい製作の途中

なら、失敗をしてもまたなおせる。われわれも柔らかい素直な心で悔い改めれば救われる。しかし失敗作のままで固まってしまったら、どうだろう。その壺は砕くしかない。そのように、頑固で悔い改めないものは、救われることなく、滅亡するのだ」エレミヤはそう言うと、壺を地面に落として粉々に砕いた。これは感銘的な説教だったが、イスラエルの心は堅かった。

4月28日 今日に通読箇所 エレミヤ書 20章1～6

「恐れが周囲に」

エレミヤの説教は人々、ことにイスラエルの宗教的指導者を激昂させた。祭司の子で神殿の主事、パシュルはその一人だった。彼は下僚に命じて、懲らしめのため、エレミヤを鞭で叩かせ足かせをはめて、人の出入りの多いベニヤミンの門につながせたのだ。エレミヤは主の裁きを語るが多かったので「恐れが周囲にある」とあだなされた。いまエレミヤは言う。今後主の裁きが現われ、バビロン軍に荒らされる時が来ると、パシュルのエレミヤ迫害が思い出されて、彼が「恐れが周囲にある」と呼ばれるようになるだろうと。

4月29日 今日に通読箇所 エレミヤ書 20章7～12

「真情の告白」

エレミヤは神様から召されて、いなむことができずお従いしてきた。これは勿論大切で光栄ある職務だが、実際は祝福よりも裁きを語ることが多く、人々に憎まれ嘲られ、本当に立つ瀬のない思いで奉仕してきたのだ。いっそ、語るのを止めようかと思うこともあるが、人々に対する神のみ思いがこみ上げ、メッセージが切迫して「燃える火が骨に閉じ込められたようで」、沈黙にもまた疲れ、結局再び困難な奉仕に立ち上がる。まことにこれこそ、エレミヤの真情の告白とも言うべき章だ。

4月30日 今日に通読箇所 エレミヤ書 21章1～11

「敗戦と亡国」

強大国バビロンの脅威が現実のものとなってくると(これはイラクがアメリカの攻撃を受けるようなものだ)ゼデキヤ王も不安になって、エレミヤに祈りを求めた。普段の不信仰や悪行は棚に上げて、この際神の祝福とか保護とか、勝利の宣告を聞きたかったのだ。しかし、エレミヤは、悔い改めないものに神の祝福がないことを改めて宣告する。バビロンの脅威は、悔い改めの機会だ。悔い改めなしに神の祝福は期待できない。いまのままでは、恐ろしい敗北亡国に終わるだろう。エレミヤは、敗戦の恐るべきありさまを描写して、今こそ王に悔い改めを迫るのだ。